「いい格好だな、お嬢様。さぁ、お楽しみといこうじゃねえか」
「触らないで！この外道っ！」
「もっと大声で助けを呼んでもいいんだぜ？こんな地下じゃ、どこにも聞こえないけどな」
「命知らずね…こんな真似をして無事で済むと思ってるの？」
「その強気がいつまで持つか楽しみだ。そら、入れるぜ。レッドのマ○コはどんな具合かな？」
「やめっ……」

「くっ…うぅ…っ…！」
「きっついな。ん？　血が出てんな。ひょっとして処女だったか？」
「なっ……！」
「頑張って痛いの我慢してたんだな。かわいいじゃねえか」
「馬鹿にしないでっ…。この程度何とも…」
「そうか、だったら激しくいくぜ」
ズブブッ

「ぐっ、うっ……はあっ、くっ…」
「あ～、締め付けすげえ…。やっぱケモノといえば後背位だよな」
「ふうっ、うぁっ、あっ、んぐっ……くふぅ」
「声漏れてんぞ、おらっ、おらっ！」
「ああうっ！うぅっ…んっ、くっ、はっ」
「うっ…そろそろ一発目イクぞ。このまま膣内に射精すからな」
「い…いやっ…やめてッ…！」
ズブッ
ズブッ

「ぐおおっ……」
「んんっ！　くうっッッ！」
「くうっ……搾り取られるっ…」
「ああっ……いやっ……」
ビュルルッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ

「はあ、はあ…たまんねえ」
「くっ、ううっ…こんな屈辱…」
「まだまだこれからだぞ。
何回でも膣内に出してやるからな」
「負けない…私はこんなことで折れたりしない……」
ビクッ
ビクッ

―一時間後―
「まだキツイが、だいぶ馴染んできたな」
「あぁっ、んっ、くっ、うぐっ」
「いいぜぇ。吸いつきといい締めつけといい、中々の名器だ」

「うぅっ、ぐっ、んあっ、あっ」
「声押さえられなくなってんじゃねえか。ほら、もっと鳴いてみろよ」
「はあっ…くっ…言ったでしょう。こんなのっ、んっ…何とも、ないって」

「おらっ、おらっ！　どうだっ！」
「あうっ！　あっ、んぐぅ！　うっ、くっ！」
（奥まで入ってきてっ……駄目っ……！　これ以上は……もう……っ）

「くっ、またイキそうだ。　射精すぞ！」
「ま、まさかっ、またっ、中にっ」
「当然だろ、一番奥で出してやるからな」
「駄目っ！　もう中はっ……」

「射精るっ！」
「いやッ……あぁあっ！」

「暴れても無駄だぜ。おらっ！　子宮で飲みこめ！」
「あっ、あぁあっ！　嫌ッ！」
「もう何発も出してんだから今更変わらねえよ。大人しく孕んじまいな」
（いやっ…こんな男の子供なんてっ…）

「ふいー、出した出した」
「はあっ…はあっ…くっ、うぅ…」
「ほんと最高のマ〇コだな。何回出しても飽きねえよ」

「殺す……絶対に、殺すっ…」
「相変わらず気丈な女だな…まあ、妊娠でもすりゃ大人しくなるだろ。これから毎日じっくり可愛がってやるよ」
（私は絶対に折れない……必ず、必ずこいつを…）